

浪江の こころ通信

・第82号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聴き取ってまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。

※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

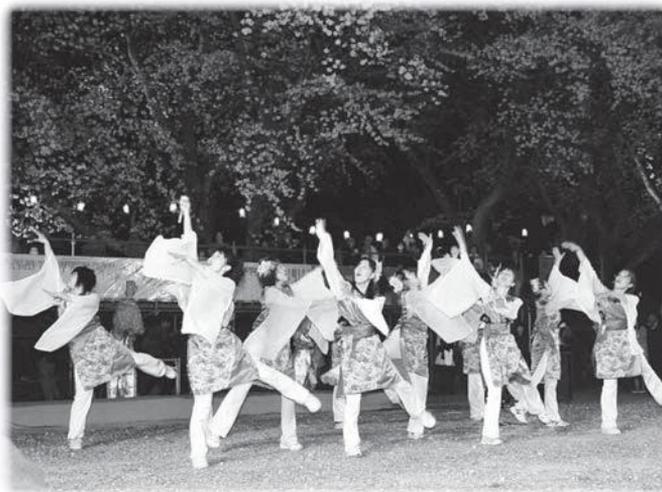
再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から7年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第82号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0240(34)4593





佐藤 光琉さん(棚塩)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永・竹下
取材日：2月17日

三年後、成人式で元気に会いましょう



伯母さんの嫁ぎ先である宮崎で避難生活を送る光琉さん。忘れることのない故郷・浪江と、今の生活の場・宮崎のことを、丁寧に言葉を選びながらお話しくださいました。



▲応援団長として凛々しい演舞姿
(光琉さんの通う高校の体育祭にて)

◆浪江での日々
浪江では幾世橋ドジャースというチームで、友達と野球をしていました。と言うより、野球を通じた友達との楽しい時間を過ごしていました。監督は「宿題が終わらないと練習には参加させない」という厳しさだったので、学校が終わると一目散に体育館の周りの土間に集まり、宿題を終わらせました。急ぐあまり下敷きも使わず、プスプスとプリントに穴が空いたりしました。僕はもらったばかりの5番のユニフォームを着る日を楽

◆今の生活、そして、将来のこと
あのまま福島にいたら、住む家もなく大変だったでしょうから、宮崎に来てよかったと思います。ここに来るまでいろいろと大変なことがありましたが、今は生活にも慣れて快適な毎日です。震災の話題を避けることも、話すことでの気まずさもなくなりました。
高校生活はバスケットと応援団を兼部して、練習に明け暮れています。宮崎に来て野球に誘ってもらいましたが、野球をする気にはなれませんでした。

◆浪江への思い
浪江のことは「思い出す」というより、「忘れることにはない」って感じです。野球を見てもそうだし、浪江の食べ物が出て何につけても、浮かんできます。やっぱり、友達に会いたいですね。でも、今の浪江では、会いたい人には会えないだろうし、自分の生活の場が宮崎になった以上、仕方がないというか、今は、それでいいと思います。大人になれば自由に福島へ行けるだろうし。
浪江のことは、月日が経てば少しずつ忘れられていくのかもしれないですね。だけど、一人でも多くの人にあの震災とその後の僕たちを忘れずにいて欲しいので、機会があったら自分の言葉で話したいと思っています。



戸川 瑛道さん(藤橋)

取材者：認定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：2月17日

僕は、浪江とこの体験を“歴史”にしたい。伝えていきたい



▲左から、母の様子さん、瑛道君、3歳違いの弟 翔瑛君

高校受験の真っ最中の取材にも関わらず、震災当時の様子や、各地に避難して後に一旦落ち着いた会津若松市の思い出、福島市に引っ越してからの体験などを、時には母の様子さんの記憶も借りながら、いろいろお話しくださいました。目指す高校での新しい友人との出会いや、これからのご活躍を心から祈っています。

◆僕には、ふるさとが二つある
震災の時、僕は浪江小学校2年生で、地震が起きる直前まで遊んでいたと思います。保育園に行っていた弟の翔瑛は祖父が迎えに行きました。大熊町で教師をしていた母は、夕方学校を出ました。が渋滞に巻き込まれ、帰宅したのは夜の9時過ぎで、家はいろんなものが倒れたり落ちたりしていたので、すぐそばにあった父の事務所に泊まりました。
翌朝5時頃から避難を呼び掛ける放送があり、母の実家のある南相馬市へ、それから郡山市の親戚宅、会津若松市、そして埼玉県

◆浪江のクラス会、したいな。成人式なら会えるかな
震災から1年余り後、リストテール猪苗代で浪江小学校の担任の先生や別れ別れになったクラスメイトとの再会の集いがありました。あれから浪江の友達とは会っていないので、みんなに会いたいですね。浪江小の思い出は外でよく遊んだことです。縄跳びやザリガニ釣り、蛍も見に行きました。城西小6年の時にバスケの県選抜に選ばれて、大会で白河のチームに入っていた浪江の友達と5年振りに再会したことが新聞に載ったりしました。
福島市に来て市立信陵中学校に入学しましたが、考え方が違っ

◆ベラルーシでの12日間は、貴重な経験
昨年8月、中学3年の夏休みにベラルーシ共和国に行ってきた。隣国ウクライナでのチェルノブイリ原発事故によって多大な被害を受けたベラルーシの現状を学ぶ「ベラルーシ友好訪問団」を父の知人が主催していて、いわきや相馬など浜通りの高校生に交じって参加しました。ベラルーシでは子供からチェルノブイリ事故の体験者まで幅広い年代の方々の話を聞き、特に小さい子供たちにとって事故はすでに歴史の出来事になっていくことを実感し、福島のことを伝えていかなければと思いました。
浪江の自宅は改装して泊まれるようになっていて、父によく連れて行ってもらっています。浪江は自然や気候もいいし、海もあるから大好きです。会津若松市や福島市では体験できないこともたくさんあります。だから僕は将来、父の仕事(建設業)を継いで復興を支え、浪江町を有名にしたいと思っています。

などを転々としてきました。母が勤務していた学校が会津若松市で再開することになり、僕たちは再び会津若松市へ戻り、市内の城西小学校に4月6日に転入しました。
会津若松は雪が凄くて、この世のものとは思えなかったけれど、積もった雪に寝転んだりして遊びました。城西小学校の同級生とはすぐに打ち解けたし、気が合いました。いろんなことを助けてくれて、本当に第二のふるさとみたいですね。高学年になる時にクラス替えがあつたけれど、仲の良い友達は皆一緒でした。スポーツ少年団で始めたバスケットボールの仲間にも恵まれました。

ていて戸惑うこともありましたが。僕は、会津若松や相馬にゆかりのある友達が多いから余計に感じるのかもしれないが、福島市はいろんな考え方をする人たちがたくさんいて、都会なんだなと思っています。



中野 卓さん・フキ子さん(高瀬)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永
取材日：1月24日

浪江への想い



▲フキ子さんのお誕生日にお子さまたちから贈られたコスモス畑の絵の前で、笑顔のお二人

長年連れ添った夫婦でも、思いはそれぞれ。「状況さえ整えば、浪江に戻って生活をしたい。」とおっしゃるフキ子さんと、「浪江に定住とは考えていないけれど、折に触れて足を運ぼう。」とお考えの卓さん。お二人のお気持ちを様々な角度からお聞かせいただきました。

◆先週、浪江町主催の交流会にご夫婦で参加されたそうですが、いかがでしたか
卓さん 初めてお会いする方もいらしたけれど、浪江というだけで、親しみが湧くね。浪江時代に知らない同士だったのに、避難してから知り合って仲良くなった方もいます。
フキ子さん 役場の方に話を聞いて、町が徐々に復興し始めていることはよく分かりましたよ。でも、今はまだ、私がつぐに帰れる場所ではないって感じました。
卓さん リフォームしたばかり

◆楽しそうですね。お二人で計画されているんですか
フキ子さん 私は生まれも育ちも浪江。避難先である佐世保出身のお父さん(卓さん)の言っている「浪江に帰る」は、言葉は同じでも何が違う、というのが正直なところ。仕事の都合で引越しているのなら、「ここは嫌、戻りたい。」とは言えないでしょうけど、この佐世保は避難場所。ここに避難しようと思ったのは確かに自分たちだけ。やっぱりいつまでたっても違和感があるのよ。：と、言うより、年々、「ここは違うなあ。」と。
卓さん 私も佐世保出身といったって、浪江での生活のほうが長いんだから、仕事仲間も友人も浪江の方がずっと多いんだ

◆『2年後に浪江に帰ってみる』という目標を立てて、それまでに徐々に体を鍛えるというのはいかがですか
卓さん 私は震災直後に肺の手術をして今は障害者手帳を持っています。自分のペースでグラウンドゴルフを楽しんでいますよ。
フキ子さん そうね。健康であるために、何か運動をして頑張ろうかしら。浪江に帰るため、って思えばね。



柴 佳男さん・美江さん(請戸)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：1月31日

南相馬でサークルが作れたらいいな



▲自宅の居間にて。「南相馬にお越しの際は、ぜひご連絡ください!」
連絡先 090(2271)8861 (柴 佳男)

震災前は、柴油店を営んでいた柴さんご夫妻。請戸のほとんどの住民の方とお付き合いがあったそうです。当時のお休みは月2回。精力的に事業を展開されていました。今だからこそ、地域の皆さんへ感謝の気持ちを伝えたいそうです。

現在は、南相馬市の新築したご自宅に娘さんと3人でお住まいです。浪江の家にあった庭石を自宅の玄関前に配置して、当時は懐かしんでおられます。

◆埼玉での「つながりカフェ」に感謝
美江さん 私たちは被災後、埼玉県に避難しました。そこでは「つながりカフェ」を実施してくださいってよく参加しました。そのお陰で知り合いも増え、習い事や体験活動などを通してたくさん楽しませていただきました。
その後、平成29年3月に南相馬市に移り住みました。当初は、ごみをどこにどう捨てるのか、町内会など区の仕組みがどうなっているのか、などが分からず苦労しました。間もなく1年を迎える今、ようやく落ち着いてきたところです。
佳男さん 初めは、いわき市に

◆のんびり暮らしたい
佳男さん 今、毎日しているのは散歩。約1時間10分歩き、合計9千歩になります。途中には愛宕神社があり160段もの石段があるんですよ。この散歩のお陰か、糖尿病の血中の数値が良くなりました。担当の医師も驚いているほどです。きっと精神的に落ち着いたことも効果があったのではないのでしょうか。ほかには、庭木や植木を眺めるのが好きで、庭木を眺めるとお庭が素晴らしい、交流しながら眺めさせてもらっています。
これからは、たまにスナップ写真を撮ったり、庭木や盆栽を見ながらのんびりしたり、気楽に過ごしていけたらいいなと思っています。趣味は特別な

自宅を構えようかと考えていたのですが、震災前に浪江で魚販売・加工を手掛けていた本家が南相馬市に移り住んだこともあり、手頃な物件を紹介してもらい住むことになりました。本家は車ですぐの距離なので、暮らしのことでいろいろと相談に乗ってもらい助かっています。周辺には、お店や病院があり、幹線道路も近いので暮らしやすいです。

◆地域の方と仲良く
美江さん 最近考えているのは「手芸や編み物が好きな人が集まるサークルを作れたらいいな」ということです。被災者のサークル活動に助成金が出るということを知りたたりもしたので、なるべく参加者に経費がかからない形で実施できたらいいなと思っています。でも、まだ行動には移してはいませんが、一緒に南相馬でサークルを楽しみたいという方から連絡をいただければうれしいです。
これからは、南相馬に住んでいくでしょう。だからこそ、地域の方々と仲良く過ごせたらと思っています。

◆ですが、人が好きで、知らない人と話してどんな人か理解するのも楽しいですね。
美江さん 南相馬に住んでからは、浪江町社会福祉協議会が実施する「お茶会」や原町の生涯学習センターで企画する「吊るし飾りの講座」に参加しています。また、月2回ダンベル体操にも通っています。このダンベル体操には、浪江町から南相馬に避難した住民の皆さんが集っています。南相馬に来たばかりの私たちにとても良くしてくださり、本当に感謝しています。